

令和5年度 第1回総合教育会議 議事録

1 日 時

令和5年7月21日（金） 午前10時から午前11時40分まで

2 場 所

市川市役所第1庁舎5階 第1委員会室

3 出席者

田中 甲 市長、 田中 庸恵 教育長、 大高 究 教育委員、 山元 幸恵 教育委員、
広瀬 由紀 教育委員、 田中 大介 教育委員、 関係職員（16名）

4 議 題

市川市における今後の教育の在り方について

5 議事概要

○西村企画課長

おはようございます。

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。企画課長の西村と申します。本日はよろしくお願いたします。

会議の開催に先立ちまして、本日、島田教育委員がご欠席とのご連絡をいただいておりますので、ご報告いたします。

それでは、市川市総合教育会議の運営に関する要綱6の（4）に基づき、会議の公開・非公開の決定を行いたいと思います。なお、総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第6項の規定に基づき、原則公開となっております。本日の議題については、非公開事由に該当する議題ではないと思われまますので、会議を公開することといたしますが、よろしいでしょうか。

————— 異議なし —————

ありがとうございます。本日の傍聴希望者は8名でございます。それでは、傍聴希望者が入室いたします。

傍聴人の皆様にお願いがございます。恐れ入りますが、傍聴に当たりましては、先ほどお渡ししました傍聴に関する注意事項を遵守くださいますようお願いいたします。

それでは、ここからの会議の進行は市長をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○田中市長

ただいまから令和5年度第1回市川市総合教育会議を始めさせていただきます。

昨年度は、教育振興大綱を策定するに当たりまして、3回に亘り協議をさせていただき、委員の皆様から様々なご意見を頂戴いたしました。

そのおかげをもちまして、子どもたちだけでなく、すべての人たちにとって一番の学びの道しるべとしての教育振興大綱を作り上げることができました。

改めて皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

本日の会議は、教育委員会から招集の求めがありまして、次期教育振興基本計画の策定にあたって、総合教育会議において、市川市における今後の教育の在り方について意見交換を行うものです。

本市の教育をより良いものにしていくためには、教育長をはじめ、教育委員の皆様のお力が必要です。

まずは、教育委員会事務局から、市川市における今後の教育の在り方について説明して、その上で、教育委員の皆様と忌憚のない意見交換ができればと考えております。

どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

■議題 市川市における今後の教育の在り方について

○田中市長

それでは、次第の1、議題「市川市における今後の教育の在り方について」説明をお願いします。

○田中教育長

それでは、議題1「市川市における今後の教育の在り方について」説明いたします。

会議資料をご覧ください。今後の教育の在り方について、関連する内容を一覧にまとめたものでございます。昨年度、市長が教育振興大綱を策定され、3つの基本方針を示されました。また、市川市教育委員会がこれまで行ってきた取り組み・課題・今年度国が策定した次期教育振興基本計画を参酌して、市川市の求める教育の在り方を示したものでございます。

詳細につきましては、事務局より説明いたします。

○小倉教育次長

ただいま、教育長から説明がありました教育振興大綱や、国の次期教育振興基本計画、そして、これまで取り組んできた本市の取り組みと課題を踏まえ、特に重要と思われる事項を3つの柱に整理しました。資料赤枠内をご覧ください。

1つ目は、すべての人の可能性を引き出す教育です。

子どもの中には、発達特性や不登校、外国籍など、特別な配慮を要する子だけでなく、教室では、日々の学習に遅れを感じている子もいれば、学習を先に進めたい子もいます。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や、個別最適な学びを進めることで、一人一人が持っている力をもっと伸ばしていかなければならないと考えます。本市は、千葉県初の特別支援学校・須和田の丘支援学校や、大洲中学校夜間学級、児童精神科入院児のための院内学級としては、国内初となる国府台病院院内学級を有するなど、全国でも類がないほど、通常の教育の中では行き届かないような子どもたちにもしっかりと向き合ってきました。すべての人の可能性を引き出す教育は、本市教育の底流に流れているものだと思います。

二つ目は家庭・学校・地域の連携です。本市は、すべての公立学校がコミュニティ・スクールとなっており、県内において本市と同規模の市町村の中では、唯一です。コミュニティ・スクールを国が提唱したのは平成16年ですが、本市では昭和55年からすでにコミュニティ・スクールという言葉を用いて、地域とともにある学校づくりを推進して参りました。

このような地域で人を育てるという考え方をもとに、幼・保・小の連携や県内初となる義務教育学校・塩浜学園を初めとする小中一貫教育を推進するとともに、学校を卒業しても学びが途切れることなく、一生涯学び続けられるような教育の基盤づくりを進めて参りたいと考えます。

三つ目は学びの環境整備です。すべての人の可能性を引き出す教育を実現するには、学びの土台となる環境を適切に整えていく必要があります。特に、ICTの活用は不可欠であり、生成AIをはじめとする急速な技術進歩への対応や、授業で活用できる教員の指導力向上は喫緊の課題と言えます。また、教員の多忙化を解消することは、将来教職を目指す若者の増加や、優秀な教職員の獲得にも繋がり、長期的な視点に立ちますと、最も重要で注力すべきことと言えます。ICT環境の充実は、授業だけでなく、学校の業務改善にも有効な方策となりますが、今後はさらに一歩進んで、新たな時代にふさわしい教育へと変容、変革をもたらす教育DXにも取り組まなければな

らないと考えます。

以上、本市における今後の教育について、三つの柱に整理をいたしました。

現在の第3期市川市教育振興基本計画の期間中、私たちは、3ヶ月間に亘る全国一斉休校という、これまでにない経験をし、改めて教育の重要性を再認識したところです。教育の大きな転換期にあつて、次期市川市教育振興基本計画は、これからの市川教育の方向性を左右する重要な指針になるものです。市長及び教育委員の皆様には、どうぞ忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

説明は以上です。よろしくお願いいたします。

○田中市長

はい。ありがとうございました。

本日は教育委員の皆さん方におかれては、お忙しい中ご出席いただきまして本当にありがとうございます。ただいまの説明を受けまして、教育委員の皆さんからご意見を伺いたいと思います。

それでは、大高教育委員からご発言をお願いいたします。

○大高委員

私からは職業柄、子どもの健康ということに特化してお話させていただきたいと思います。

以前より、総合教育会議でも指摘してきましたけども、今の子どもたちの一番の健康の問題は、目と耳です。

目に関しては、ご承知のようにスマホとかタブレットの液晶画面の長時間凝視による影響。おそらくほとんどのお子さんたちは、もう今、眼鏡が必要になってきているのではないかと。

じゃあ、液晶をやめるかということそういうわけにはいかないの、専門的なケアがまず必要となります。

それと、これも以前指摘しましたけれど、イヤホンによる聴力障がい、現代の子たちならではのですね。いつも耳にイヤホンを付けて音楽を聞いたり、いろいろな情報を得たりしているようですけれども、これによる聴力低下はもう耳鼻科学的に証明されております。

これは不可逆的に治らない可能性があるの、治療よりは対策・予防というのはこれも耳鼻科学会から指摘されていることでもあります。

その一つが何より問題だと思うんですけれども、現代のツールによる、副作用と言っただけなんですけど、こういったものがあるので、どっちを優先するかというのは非常に難しいと思うんですけれども、医学的にはちょっと心配と考えています。それから、先日、全国体力テストの結果が発表されて、予想通り今までで最低だったと思います。

これは、やはりコロナ禍が大きく影響していると言われてますね。外での活動が減って、ずっ

と家にこもりきりで、体力が落ちたのではないか。それもやはり大きな原因の一つだとは思いますが。一応5月からコロナも5類になりまして、皆様ご存知のように、規制がほぼ解除になり、子どもたちが外で遊ぶ姿というの、増えてきたと思います。先日ちょっとした子どもたちのイベントに参加したんですけれども、外で遊ぶ子どもたちはやっぱり生き生きしていますね。そこで、自分が「こんなことでも面白いんだな」と思うようなことでも喜んでいて、後で子どもたちに、「これは面白かったの？僕はあんまり面白くないと思ったんだよ」と言ったら「いやあもう面白いよ」と言う。やっぱり外での活動というのは、原始以来人間に必要な、太陽を浴びる、紫外線を浴びるのは別に悪いわけじゃないと。太陽光を浴びるということと外の空気に触れるということは、人間生活でやっぱり欠かすことはできないことであるので、今後も、もちろん今、学校の先生たちもそういうプログラムをもちろん入れていってほしいと思うんですけども、ぜひ、学校外の活動を充実させていただきたいと思います。

もう一つはこれもいつも言っているんですけど、最近の子たちはやはり睡眠異常です。全員がそうとは限らないですけど、ゲーム等で夜更かしする、朝昼逆転している。前回、ゲームをやるために学校から帰ってきて寝ちゃって、夜起きるというのを平田先生から聞いてびっくりしたんですけど、これも人間というのはやはり原始的に、日が昇ったら起きる、日が沈んだら寝る、これが健康に一番良いのは科学的に成長ホルモンの分泌ということでもう証明されているので、あとはこういう早寝早起き。小学校を視察した時に早寝というのをテーマに挙げた学校も拝見していますけれども、そういうところに気をつけていただきたい。

もう一つ大事なのが、コロナ禍の後で副作用というのですかね、有害事象ですけど、メンタルをやられている人がかなり多いというのはわかってきています。

これは成人のデータなので、子どもたちにはどうかかわからないですけども、コロナに罹ったからではなく、コロナで家にずっとこもっていて、ちょっと精神が病んじゃうというのは、最近のデータであるらしいのですね。よくよく考えると、ずっと家にいて、何だか解除になったけど、外に出にくくなっちゃったとか、そういうメンタルケアがもしかしたら子どもたちにも必要があるのかな、というふうに感じました。これは大人のデータですけども、大人だけとは限らないんじゃないかな。その辺を先生方にも気をつけていただいて、コロナに罹ったのではなく、コロナでこもったことによるメンタル異常をちょっと危惧しています。

ちょっとずれるかもしれないですけど、市川というのは本当に自然が豊かで、名所旧跡もたくさんあります。ここを求めていく教育の在り方を、2番の最後に文化財の保護と活用とか書いてありますけれども、ちょっと市川は特殊ですよ。東京に近くていろいろな情報がたくさん入る。さらに都会にはない自然と名所旧跡、そういう文化が非常に豊富な良いところですのでさっき話したその校外活動の一つにそういうものを入れていくのが、やはり市川市としてメリットじゃないか、と感じました。

最後に、いろいろ言いましたけど、最近気がついたのは、やっぱり親から教育していかないと駄目だなと。今言った話を子どもたちに、「液晶見過ぎないでね」とか、「イヤホンできるだけやめようね」とか、「歩きスマホは絶対危ないよ」と言っても、そもそも親たちが、そこをどう理解するか。というのは、職業柄若いお母さんたちといろいろやりとりしますけど、結構わかってないなという方が多くて、これじゃあ子どもたちは推して知るべしだなと感じております。ですから子どもたちの教育と親の教育、先生方はもうプロですから、私が言うまでもないと思うんですけども、そういうことに関して思うところがございます。

○田中市長

ありがとうございます。大変興味深いお話を聞かせていただきました。

それでは次に山元委員、よろしく願いいたします。

○山元委員

それでは私の方からは、学力向上、個別最適な学びというような観点に関して、私の考えていることをお話させていただきたいと思います。

今、学校という現場を見たときに、大きく二つのことに危機意識を持っています。

まず一つ目は、今の時代の流れに学校がものすごく取り残されているということです。いわゆる、今お話も出ましたけれども生成AIというのが議論される中で、でも学校現場側はある意味でいうと、昔ながらの積み重ねてきた教育を淡々とやっている部分がございます。いわゆるICT化の遅れという部分、これからの時代に本当に求められている学力は何なのかということに身に付けていかないと、今までやっていたものを繰り返していいのかという危機意識が一つあります。

もう一つは、今、若年層教員が増えています。やはり今までの経験値で子どもたちに接していた先生方がいなくなり、若い先生たちが今すごく頑張っています。ただ、非常に与えられた環境は厳しいです。人手も足りません。教員の数不足というのは大きな社会問題ですが、非常にその先生を見る周りの目も厳しいですし、非常に業務量も多いです。こういう中で、どうしていけばいいのか。愚痴を言ってもしょうがないので考えると、逆に若年層が多いというのは、状況を変えられるすごいチャンスだって考えるべきじゃないかなと思います。若い人たちの特徴として、いわゆるICTは得意ですから、もう今までの既成にとらわれないで、新しいやり方、新しい指導法ということで、学校のカリキュラムを見直していく時期、今しかないなという意識を持っています。そこで具体的に考えていったときに、もちろん子どもたちにとって基礎的な学力というのは絶対あると思います。やっぱりちゃんと鉛筆を持って書くことも大事ですし、実際のものに触れることも大事。友達と一緒にやる。すべてそういう人としての関わり、すべてICTという意味ではなくて、実体験。それが本当に子どもを豊かにするので、そこは非常に重要。

また、基礎学力としての知識。例えば、本当に子どもたちがいろんなことを考えて組み立てて、これから未来を創造するにしても、一番最低限の基礎知識がなければ組み立てようがない。的確な例かどうかわからないんですけども、子ども自身が持っているピースは、ブロックを組み立てるとして、いろいろなピースを持っている子は、それをいろいろなふうに組み立てることができるけれど、元々ピースをちょっとしか持っていない子は、これで何とかしようとしてもどうにもできない。ですから、やはり小学校時期にいかに子どもたちに多くのピースを持たせるかというのはとても大事だと思います。ただそれを教員が全部やろうとするのではなくて、ここでICTをもっと活用して、能率的にICTに任せられることは任せて、タブレット等いろいろ用いる中で、何も先生が全部プリント刷って配ってやらせて回収して丸つけなくてもいいわけで、そういう意味でも省ける部分をどんどん省いて、本当に先生たちが子どもたちに与えるべき、その仕事は、教育すべきことは何なのかということを進んでいく。そういう改革が必要じゃないかと思っています。

そして、さらにその基礎学力を基に今度は子どもたちに、文科省でも言っている主体的・対話的な学び、それを自分が持っているピースを使って、いろいろなものを組み立てていくかということでも、さらに次の段階のICTの活用というのが出てくると思います。そんなふうに、今やっている教育をより充実、効率化するために、せっかく市もたくさんのお金を出していただいて、1人1台のタブレットがある。でも、それを本当に活用していくのはこれからだし、それができなければ、本当に教育の充実は図れないんじゃないかという意識を持っていました。それがまた教員の多忙化であるとか、そういうものの解消にも繋がっていくのではないかなというところで、その点を強く今度の教育振興基本計画の中には盛り込んでいく必要があるんじゃないかと思います。

ただ、この改革はある意味学校にも合わせて、あるいは教科の研究に任せてというやり方では、とても追いつかない。もっと横軸を通して、言い方は悪いんですけども、教育委員会が強いリーダーシップを発揮して、もうこの何年間かは、それをメインで全員でやりましょうという強いメッセージを発して、具体的な手だてを講じていくということが、それを本当に実現、具現化させていく。そんなことを言って私自身がじゃあどうするんだと、いうものはないんですけども、教育委員会のぜひ英知を集結させて、そういったものをこの基本計画の中に盛り込み、そして具現化させて、ぜひ学校現場の取り組みを変えていっていただけたら、そういう願いを持っております。

私からは以上です。

○田中市長

山元委員ありがとうございました。

皆で参加して、議論を深めていきたいということで、次の委員にマイクを回す前に、藤井学校教育部長。今、真剣に聞いていらっしゃる姿。私の目に入りました。

山元委員のご発言に対し、現場の姿、部長のご意見をちょっと聞かせてください。

○藤井学校教育部長

大高委員、山元委員と続けてご意見いただいて、山元委員のICTの今後の学校現場での活用ですけれども、コロナ禍に始まって、ようやく学校が目指すICT教育ですとか、先生方がこれから取り組むべきICT教育の方向性というのが、少しずつではありますが、方向性が見えてきたように感じております。

教育委員会といたしましても、今後10年後に目指すべき学校教育の姿というものを、教育委員会の中でも、検討しておりますし、その中でICT教育をどのように活用していくか。

先ほどお話に出ましたChat GPT等の生成AIの学校現場の活用等については、5月に既に通知文が出ておりますので、こういった最新の国・県の通知を踏まえた上で、市川市独自のICT教育は教育委員会がリーダーシップを発揮して進めていければというふうに考えております。

○田中市長

教育次長から何かありますか。

○小倉教育次長

山元委員からご指摘があった通り、今は本当に教育の変革期だと思っています。

昨年度、明治の学制が敷かれてから150年経ちましたけども、学校の授業というのは、子どもたちが黒板の方を向いて先生の話聞くという、大きくはそのスタイルは変わっていないんですよ。

これだと、やはり一人一人の力を最大限発揮できるような教育というのは難しいと思っています。ICTが入りましたので、個別最適な本当に一人一人の持っている力を最大限発揮できる、教育の方向性というのをこれからしっかりと考えていかなきゃいけないと、そのように思っています。以上です

○田中市長

山元委員、どうぞ。

○山元委員

今、小倉教育次長からもお話がありました。学校へ行くと、日本全国どこへ行っても、皆が

同じ、金太郎飴じゃないですけど、そんなことがちゃんとみんなに浸透している。それが今までの日本の教育の良さだったんです。いかに効率よく全員に同じことを叩き込むかというそういう教育を目指してきて、それはそれで今の日本を支えたと思うんですけども、これからの時代を、自分なんかは先はないんですけど、これからの若い人たちは、それでは生きていけない。だから、私たちの提供する教育も変わらなきゃいけない。ただ非常に大きなことで、国も県ももっと真剣に考えて欲しいと思うし、必要な予算をつけて欲しいと思うけれども、少なくとも市川市も、市としてこういう方向を目指して、今変わろうとしていますというのを明確に先生方に示すと。市川の先生方、大変真面目な先生ばかりですので、それが嫌という人はなくて、絶対皆さん頑張ってくださいと思っています。そのリーダーシップが今本当に求められているというところ、ご理解いただきご意見をいただいたので、すごく期待したいと思っています。

○田中市長

山元委員にちょっとお聞きしたいんですけども、画一的な教育の質の充実は、今までの教育現場に認めると。ICTの時代に入って、ある意味答えを先に知る。そこには、画一的というところには、変化があるんじゃないでしょうか。

○山元委員

私は変化を求めなければいけないと思っています。

もう今まで私たち一生懸命やってきたけれども、今社会が多くの課題を抱えていて、これを次の世代が解決していくためには、もっと個性の尊重であったり、本当にいろいろな個別の持っている才能を活かすということはすごく求められてくると思います。

今までの教育、私が精一杯40年近く教員として働いてきて、それを否定する気も全くないし、すばらしいものだったと思いますが、やっぱり欠けていた点はそういう個性の尊重あるいは新しい発想を活かすとか、そういう視点は、学校現場が豊かに持ちだしていますし、そういう中でうまくICTを活用していく。ICTはしよせん道具ですから、それをどう活用するかというのは、結局教員の能力になると思うのです。その教員の能力をどう引き出すかということが、次の私たちの課題であると思います。いきなり子どもたちを変えられるわけではなくて、子どもたちを変えるために教員がどう変わらなきゃいけないかということが、次の課題になってくると思います。うまく言っていないんですけど、せっかく若い先生方がたくさんいるから、その若い芽を潰すのではなく、若年層の教員と私たち教育委員と一緒に話しをする機会が設けられて、いっぱい意見を聞きます。彼らは一生懸命なのです。

だけど、それが未熟故に繋がらないことで潰されている部分もあるので、すごくそれが悔しく

て、本当に若いフレッシュな、前向きな気持ちとか能力を、もっと活かせるような、良い学校になれば良いなどが、すいません、思いつくままに申し上げてしまい失礼なのですが、そんなことを実感しています。

○田中市長

長い経験則から非常に重要なご指摘をいただいたと思います。

また、現場が忸怩たる思いを持たれているということも大変良く伝わってまいりました。

次に、広瀬委員から、よろしく願いいたします。

○広瀬委員

よろしく願いいたします。

私の方からは求めていく教育の在り方の1番、すべての人の可能性を引き出す教育としての、多様なニーズへの対応に関連して考えておりますことを述べさせていただきたいと思います。先ほど、山元委員の方からも、少しお話がありましたので、そこと重なる部分もあるかもしれませんが、ご了承いただければと思います。

近年の教育現場では、特別な配慮を要する子どもや、不登校、外国にルーツがある子ども、様々な家庭背景を持つ子どもなど、多様なニーズを持つと言われる子どもたちの話題が事欠かないと思っております。そうした中、教育や保育そのものへの考え方も、先ほど山元委員も仰っていましたが、先生が何を教えるかというところから、子どもが何を学ぶかというところに大きくシフトチェンジしているところかなと思っております。従来の、先生が何を教えるかという教育の中には、その子どもの多様さというところでは、先生が教授する内容の理解等が難しいという、文脈で捉えられてきていることも多かったのではないかなと感じます。

すなわち先生の話について来られないとか、先生が教えている内容が理解できない子ども、というような位置付けです。そのような形の中では、いかに先生が教えている内容に子どもがついてこられるようにするか、というような手だてを講じることであったりとか、先生の教えについてこられないのであれば、その子どもたちは場所を変えて教育をすることが必要だ、というような議論に傾きやすいところがあったのではないかなということも思っております。

これからを考えると、子ども自身の学びということにシフトチェンジしていくというところではありますが、その多様な子どもたちに対しても、その子ども一人一人の学びというのベースに教育が語られていくこと、すなわちその子どもの学びに、先ほど山元先生も仰っていましたが、どのように教育や保育がフィットしていくかというようなことが語られることがますます重要になってくると思っております。その鍵となるのが、先日閣議決定されました教育振興基本計画で、二つのコンセプトが出ておりますが、その一つとして、日本社会に根差したウェルビーイングの

向上ということが示されております。この計画の中では、ウェルビーイングの実現に関して、多様な個人それぞれが、幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるということであり、教育を通じて、日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図っていくことが求められるとい位置付けられています。

学校では先生方がより多くの子どもたちに幅広い知識や学びをと考えて、日々思案を重ねておられることはもちろん承知しておりますし、とても大切なことだと思っています。一方で子どもたちは伸びしろの塊なので、先生の想像を遥かに超えるような反応ですとか、姿を見せるというようなことも、教育現場ではあるのではないかなと思っています。そうした姿に対して、教育者・保育者としてどのような眼差しを向けるのかということ为先ほどと重なりますが、今後、より問われていくと考えております。

その話と少し関連いたしますが、私は保育者の養成校で勤務しておりまして、学生に対して保育者の二つの眼差しというようなことをお話をさせていただくことがあります。

それは評価の眼差しと共感の眼差し、という言葉で説明をしております。評価の眼差しというのは、その先生が思い描いている子どもの姿、理想とする子どもの姿のイメージがあって、それと、目の前にいる子ども達の現状との乖離があるときに、それを修正しようというところで、「それをやっちゃだめだよ」とかそういったような働きかけですとかそういったことをしようとする眼差しというところですね。

一方で、共感の眼差しというものは、例えば、思い描いているものがあっても、その場に先生も一緒に参加する、というところ。子どもたちと同じ世界を見ようとして、わからないところもたくさんあるとは思いますが、わからなさを抱えつつも、その子を肯定的に捉えようとする眼差しであると学生には説明をしています。

いずれの眼差しも教育現場にとってはすごく重要だと思うんですけども、以前の何を教えるかのベースで教育・保育を考えたときには、どちらかといえば特別な配慮を要する子どもというのはその評価の眼差しというのが、向けられることが多かったのではないかなということも思っています。でも、これからを考えると、その子ども一人一人の学びをベースにして考えていく時代というところで、先ほど申しました子どもたちのウェルビーイングの向上を図っていく実践を目指す中で、共感の眼差しを、意識的に増やしていくところが非常に重要になるのではないかなと感じています。それは、先ほどの教育振興基本計画にも示されている、子ども一人一人の持つ強みや長所へ着目するという視点でもあるかなと思っています。この共感の眼差しというものを増やしていくために、いわゆる特別支援教育の領域で、近年その合理的配慮という言葉を目にする機会も増えていると思っています。それが合理的配慮と基礎的環境整備という単語で、セットとして捉えられるような言葉ではありますが、私自身はその合理的配慮を支える基礎的環境整備というのが、すごく重要になってくるかなというふうに考えています。

合理的配慮と基礎的環境整備という言葉については、文科省の方で定義がありますけれども、私自身はその合理的配慮というのは子ども一人一人に応じた調整という部分であって、基礎的環境整備というのはその調整を支えるもの・土台部分のすべてと捉えております。

奇しくも令和5年3月に文科省から、通常の学級に在籍する障がいのある児童生徒への指導のあり方に関する検討会議報告というものが出されておりますが、それにおいても、基礎的環境整備に関する内容というものが示されていたと思います。この報告の中では、その通常学級に在籍する障がいのある児童生徒への支援のあり方に関する現状と課題等が、五つ示されていたんですけれども、最近の調査で学習面または行動面で著しい困難を示すというふうにされた児童・生徒が、小中学校で8.8%、高等学校では2.2%という結果が出ています。これはすなわちすべての学級に、特別な教育的支援が必要な児童・生徒が在籍しているという可能性を示している、とそこでは述べられています。

一方で校内委員会においてそうしたお子さんの中で支援が必要と判断されている児童・生徒というのが、小中学校では28.7%、高等学校では20.3%というところで、校内委員会という機能ですね、それが十分に発揮されていないというところも、この報告の中では指摘をされています。あと、他校通級の話も述べられていて、市川市内にも通級指導教室がいくつかあると思うんですけれども、自校に通級の学級があれば子どもが中で通うだけで済むんですが、他校だと他校通級というふうに言いますが、そういったものを小学校では約3割、中学校では約2割というような割合で実施されているというところでは、児童・生徒自身や保護者の送迎等の負担が大きいというようなことも指摘をされています。

これは高等学校の話になりますけど、高等学校の方でも通級による指導というのが必要と判断されている生徒がなかなか受けられない実態というのもあって、実施体制が不十分ということも同じように指摘をされています。

ちょっと話が長くなって恐縮なんですけれども、報告の中で、就学先の決定というところで障がいの重い児童・生徒が、通常の学級に在籍している状況というのも報告の中では指摘があって、より専門的な支援が必要であるというようなことも言われています。また、令和4年9月9日に障がい者権利委員会の勧告というのを受けていると思うんですが、その中で障がいのある子どもと障がいのない子どもが可能な限り同じ場でともに学ぶための環境整備の推進が必要であるというような内容も示されています。

先に事務局の方からも話がありましたように市川市はすごく頑張って多様な子どもに対応するということでいろいろな取り組みをされていて、それがすごく強みだというふうに思っております。今後も例えば学校教育環境整備等の話題の中で、様々な取り組みが行われる予定だということも聞いております。

また、幼児教育の分野の保育者養成の話にもなってしまうんですけれども、幼児教育と学童期

のかけ橋期というような話題というの、昨今議論の取りまとめというのがなされていて、その幼児教育で大切にされている子どもの主体的な活動というのを支える、例えば環境を通した教育というような視点ですね、それを通して積み上げられてきた子どもの学びを学童期にしっかりと繋いでいくというところの重要性がさらに強く言われていると思います。

ですので、先ほどまでに述べたような方向性を意識していただきながら第4期の市川市教育振興基本計画の策定がされるといいなと期待を持っているところです。

もう一つ、教育振興基本計画のもう一つのコンセプトですけれども持続可能な社会の創り手の育成ということが示されていると思います。その中でもやはりダイバーシティ&インクルージョンというような話題も多く聞かれるようなところも感じます。

いわゆる多様性というところに関して、私も良く保育現場等にかがわせていただくのですが、子どもたちから教えていただいたことがあります。これはすごく具体的な場面の事例になってしまうので恐縮ですが、幼稚園の話なのですが、長縄で保育者と遊んでいた特別な配慮を要する男の子がいて、そこに2人の年長さんが入れてと言ってきましたね。男の子が一番というところに強い思いがあって、自分が一番でなきゃ嫌だというようなところがあって、それを譲らないよということを条件に2人の仲間入りをOKするんですけども、途中で遊んでいた2人のうちの1人が、自分も一番をやりたいと言い出してちょっといざこざになったんですね。そうした中で、1人の子と特別な配慮を必要とする子ども1人の2人が一番を争っている状況なのですが、それを見ていたもう1人の女の子だったんですが、その子が「一番は1回、二番は2回、三番の子は3回跳べるということにしたらどう？」という案を出したんですね。

その意味がわかると、三番の方がお得とか、そういうようなところで、子どもなりに計算して決着を付けたわけですけど、結局一番になりたいと途中から言った子は三番を取って、ずっと一番に固執して、最初から遊んでいた子は四番を、というような。そして一番は言い出した女の子が取って、二番は先生になったというのがその流れではあるのですが、5・6歳の子どもたちの事例ですけども、多様な特別な配慮を要する子どもがいて、そして一番多く跳びたいという子どもがいて、その2人の思いをやっぱり両方とも受けとめてそれを大事にしたいというところで、その子たちは他の自分の理解できないところだから知らない、と無視するわけでもなく、思いを大事にしたいというところから生まれてきた妙案だったんだなと思いますし、そういうプロセスというのは創造的なものだなと思います。これからの社会を生き抜くために、持続可能な社会の作り手ということを先ほど申し上げましたが、そういった部分では、とても大事な力の基礎というところではないかなと思っています。

同時に、こうした事態というのは、その特別な配慮を要する子がいたからこそ、暗黙の了解が成り立つ間柄の中では決して生じ得なかった事態かなということも思うと、やはりそのような子どもたちが集い、その中で子どもたちが学び合うという機会というのは、これからより重要性が

増してくるのではないかなというふうに思っています。

そうした中で今までの教育観というところがどんどん変化していくということも求められていきますが、今までの教育、特に教育に携わっていない大人の方はその自分の受けてきた教育ということへのイメージがかなり強いのかなというふうに思うんですけれども、そうした部分も納得していただきながら、未来の教育を変えていくことの必要性もあると考えたときに、今までですと、どうしてもテストで何点とったとか、かけっこが速かったというその結果論で、その子どもが評価されて、それを褒める周囲の大人がいてというところで、自身の経験を踏まえるとそういったところもあったかなと思うんですけれども、これから子どもの学びを重視していく中では、その教育のプロセス、その結果には至らないけれども、そのプロセスがどういうふうに展開されていて、それが子どもにとってどういう学びであるかということのを可視化していくことの必要性が大きいと思っています。

先ほど山元委員からICTの話が出てきて、子どもに対するICTもそうですが、例えば保護者や地域に対して発信するツールとしてのICTという部分に関しても、そのプロセスが見せられる。

例えば、幼児教育なんかでは、保護者限定にはなりますが写真、子どもたちの遊んでいる様子を写真に撮ってそういったところを見せて、その結果としてはまだ全然結びついてないけれども、子どもたちが今こういうことを試行錯誤しているんですとか、こういったことで話し合っ、今こういう現状ですということを見せていきながら、例えば運動会であれば運動会当日を迎えるというところで、保護者は、今までは結果としての運動会当日しかわからなかったけれども、そのプロセスというのを見ていくと、たとえ当日がうまくいかなくても、子どもたちはこんな学びをしてきたんだなということを感じ取れるのであれば、その意識というのは大分変わってくるのかなということもちょっと感じております。

大変長くしゃべってしまいましたが、多様なニーズへの対応ということで考えていることを述べさせていただきます。

○田中市長

広瀬委員、ありがとうございました。

それでは、新しく教育委員に就任をしていただきました、田中委員の方からよろしくお願いいたします

○田中委員

私からは、この求めている教育の在り方の3番目ですね。「学びの環境整備」で最後に記載があります職員の多忙化解消について、私の考えを述べさせていただきたいと思います。

先ほど冒頭、小倉教育次長からご説明がありまして、この点、教員の獲得であるとか、長期的

な教育の充実は最も重要だというようなお話がありまして、私も同意見でございます。

改めて私の考えもお話させていただければと思います。多忙化する教職員という問題は、おそらくもう昔から社会的な課題として、私も聞いているように思います。ただ、これがずっと続いているということというのは、本当に根深い問題なのではないかと考えております。結局、この多忙化の場合ですけれど、個別の施策を実現するためには、なかなかどのようなことをしていけばいいのかというのは難しいかと思うんですね。ただ、この多忙化をなぜ解消しなければいけないかということを考えてみると、結局教育というものは、学校教員と、生徒の間のコミュニケーションであったり、対話の中で生まれてきますので、一方が忙しいという状態であると、結局充実した教育が行われなれないということは避けられないのではないかと考えております。今回、この求めていく教育の在り方がいろいろな点でございますけれども、例えば個別なニーズに対応するといった場合にも、そのために、教員が却って多忙化してしまうということがあっては、結局その目的が達成できないのではないかと思うところです。

ですので、最も重要ということにつきましては、個別このようなところを解消して、教員の多忙化を解消するということよりは、この個別の施策をしていくときに、決して忘れてはいけない視点として、この施策をする時にこれが同時に教員の多忙化になっていないか。もしくは、ちゃんと解消するような形で実現されているのか、という視点や考え方を常に強く持つていく必要がさらにあるのではないかとこのように思っております。今回、皆様のご意見をお聞きしていると、ICTの活用というのは避けられない問題ですし、最も重要なことだと思います。これは当然、教員の多忙化解消という側面でも実施することもあります。実はそれをやるために、教員に過度の負担をかけないか、であるとか、あと使いやすいICTだということ、ちょっとこれは専門ではないんですが、例えば使いやすいアプリとかは、アクセスに何クリックするかによって、それを一部使う、普及するかどうかとか、そういう差がある。ですので、ICTも、できるだけこの使いやすいくて、教員が本当に多忙化解消できるようなものを提供できるのかというその視点を強く持つていただく必要があるのかなと思っております。多忙化の原因については、おそらくいろいろな調査で、細かい項目で原因が挙げられていると思います。個別の学校の規模であったり、その教員の方々のキャリアであったり、施策であるとか、いろいろなところで、原因は変わってくるかとは思いますが、基本的には、やはり作業が多いか、人が足りないかと、そこに収束されるのではないかと考えております。そう考えますと、実際解消というのはよく言わないかもしれませんが、先ほどから述べている通り、教職員の多忙化が解消されているということが、すべてにおいて施策が実現される基本的な土台となるというような考え方というのは思うところです。私、今年度から教育委員に任命させていただきまして、4月、5月、6月、7月と何回か現場に接する機会がございました。具体的には運動会の視察であるとか、若手教職員の方の研修会に参加させていただきました。そこで本当に現場の教員の方の熱心な姿に感動したところであります。ただ一

方で、漏れ聞こえる話の中で、多忙だなというのは私も率直に感じるところがありました。ただこれを解消するときに、やはりこれは学校現場に任せるとなかなか解消はできないんじゃないかと思っています。例えば企業でいうと、雇用者の使用者の関係で、使用者が忙しくて大変です、というときに頑張ってくださいということで解消できないのとシンプルに同じだと思いますので、やはり雇用側というか、その教員の就労環境とかを変えるというのは大事じゃないかと思っていますので、最大限知恵を絞って、本当に長い問題ですので一挙に解決することはできないと思いますけれども、しかし、一つずつ細かいことでも、現場の教員にこれは解消されたな、前とは違ったな、という形で変わっていくということが必要ではないかと思っています。

最後に、広瀬委員からお話があったように、教育って、僕もそうですけれども、自分の経験のみで判断してしまって、自分が教育を受けていたときは、先生が忙しかったのかどうかとか、多分考えていない。だから、もしかすると忙しくないと思って社会に出てきたかもしれない。社会に出たときは、それぞれ皆さんが社会で活躍される中で、多忙であったり、いろいろな感情を持っておられるし、学校の現場の先生の裏側というのはあまり見る機会がないと思います。

私もたった2回、現場と接した機会でも、私はこんなこと知らなかったということがたくさんありましたので、やはり忙しいというのを言い訳にするという意味ではなくてですね、例えば、多忙化の解消のときに住民や保護者の理解を得るような必要があるような場合には、やはり現場の実情というのを正しく知っていただく必要があるのではないかと思うところです。

私からは以上です。

○田中市長

ありがとうございます。田中委員のお話を聞きながら教育長も発言の内容を整理されているような、そんな様子を拝見しておりました。

委員の皆さん方からの意見を受け、田中教育長の方から発言をいただきたいと思います。

○田中教育長

それでは、教育委員の皆様方から、市川市における今後の教育のあり方について、様々なお考えをご提示いただきまして大変ありがとうございました。

資料の一番右の欄に赤で囲われたところですが、求めていく教育の在り方として、三つの柱で整理しておりますので、こちらに沿いまして、私の方から思いと言いましょうか、上手にまとめることが果たしてできますかちょっと心配なところでもありますけれども、述べさせていただければと思っています。

まず一番初めの、「すべての人の可能性を引き出す教育」につきましては、山元委員の方から、学力向上についてのご指摘がございました。

そこで感じましたのは、学力は何かということ、やはり教育委員会と教職員、それから保護者や地域の方々と共通認識を図ることが必要だということ、を改めて感じたところでございます。その上で、学力向上への取り組みについては、子どもたちが学ぶ意欲・意義ですね。子どもたちが学ぶ意義を理解し、各教科等を通じて学んだことが将来に繋がるような授業改善、あるいは教師の授業力アップというものが必要なんだと考えたところであります。それから、学校教育で大事なところは守りながらも、教職員の意識改革やICTなど、実現可能な方法は、積極的に取り入れて進めていくことが必要であるということを押さえていただきました。

続いて「健やかな心と体の育成」について、大高委員からご意見を頂戴いたしました。やはり、今の子どもたちですが、屋外で遊んだり、スポーツに親しんだりする機会を意識して確保する必要がある、我々の方にもあるのかなということを感じさせていただきました。そして、先ほどご指摘の中では、耳や目のケア、それから睡眠というご指摘もございました。そういう中でよく食べ、よく動き、よく寝るといった基本的な生活習慣を身に付けることも重要であると感じましたし、そのためには、子どもを取り巻く環境を理解した、保護者の積極的な関わりが必要ですので、家庭と一体となって、子どもたちの健やかな心と体の育成を進めて参りたいというふうに考えたところでございます。それから、メンタルケアというお話もございました。改めて、対話の重視ということ、それから心のフォロー、そして適応指導あるいは適応した教育というものが求められる、ということ強く感じました。また、親の教育というご指摘もございました。親御さんと共に語らう場面というか語り合う場というものも作っていかねばなりませんし、保護者を対象とした講演会、そういうものも取り入れながら、保護者の方々と共に考えていく、そういう姿勢を持っていく必要があるのかなと感じたところでございます。

続きまして、「多様なニーズへの対応」として、特別支援教育につきまして大変広い領域から広瀬委員よりご指摘をいただきました。ありがとうございます。まず一つは、お話を聞いて感じましたのは、障がいの有無にかかわらず、すべての子どもたちに共通する配慮は必要であるということを考えました。それから、お話をお聞きして、私が受けとめましたのは、まずはやはり一人一人の学びというものを保障していくのだ、ということです。そのためには、個別最適な学びを、学校も我々も提供していくように努めていく、こういうことが大事なんだろう、という押さえ方をさせていただきました。それからもう一つは、改めて、まさに共感の眼差し、こういうものがとても大事であるということがわかりました。それと併せて合理的な配慮、また基礎的環境整備ということも併せて進めていかなければならないし、考えていかなければならないことだと押さえました。そして、通級指導教室のお話もありましたけれども、やはりここではそこに関わる先生が、環境を整えながら専門的な支援をしていくことが、より効果的な指導に繋がっていくだろうと、押さえていただいたところでございます。以上の事柄を踏まえまして、求めていく教育のあり方として、私このように一つ目をまとめさせていただきました。

これまで須和田の丘支援学校や大洲中学校の夜間学級の開設、また、国府台病院の院内学級の設置など、これまで市川市は全国的に見ても率先して、すべての人の可能性を引き出す教育を進めてきております。このような市川教育の強みを充実発展させるとともに、今後も多面的、多角的な視点を持ち、歩みを止めず、まい進して参るという所存でおります。これが大きな一番目のまとめとさせていただきます。二番目でございますけれども、こちらは委員の皆様方から特段のご意見がございませんでしたので、私の方で少し考えていることを述べさせていただいてまとめに入って参りたいと思います。

まずは、全校に設置している学校運営協議会、これは千葉県の中でも市川市だけでございます。この学校運営協議会と、中学校区、義務教育学校区で設置している地域学校協働本部と両輪で取り組んでいる市川版コミュニティ・スクール。これを市川教育の特色として、これからも充実発展させていきたいと感じたところでございます。これを踏まえまして、まとめでありますけれども、求めていく教育の二つ目といたしましては、家庭・学校・地域の連携は、複雑化・多様化している教育の課題を解決するにあたって非常に重要な意味を持っておりますので、先ほど申しました市川版コミュニティ・スクールを基盤として、家庭・学校・地域の連携をさらに深めて参りたいと考えたところでございます。

そして、最後になりますが三番目の学びの環境整備でございます。ここでは山元委員から、ご意見を頂戴したところでございます。ここでのまとめでありますけれども、やはりICTの基本的な環境整備を行うことと、今は次の活用段階に来ておりますので、事業研究をさらに進めて、デジタルとアナログのベストミックスといった適切な組み合わせを模索していきたいと改めて認識をしたところでございます。それから、多様な子どもたち一人一人の能力を引き出せるよう、教員が子どもたちに寄り添い、伴走しながら、より効果的なICT活用を進めて参りたいというふうに思っております。その伴走の意味はやはり、子どもたちと寄り添う教員も必要だと思うんですね。これからさらに支援員を増やししながら、子どものニーズに合った、ICT教育を推進できればと思ったところでございます。それから教員の多忙化解消につきましては、田中委員からご指摘を頂戴いたしました。ありがとうございます。その中で、やはり教員の多忙化解消のためには、保護者や地域の方々の理解を得ながら進めていくということが大事だということを押さえていただきました。それと関連して、保護者や地域の方々を含め、学校に関わるすべての人が、教職員の働き方改革のための重要な当事者であり、小さな改革を積み重ね、効率化を推し進めていかなければならない。そのように押さえたところであります。

そして特に私が、ああ、なるほどと思いましたのは、我々はいろいろな施策を打って出ますけれども、その施策が、教職員の多忙化を招いては意味がないわけで、必ず対応を打って出る時には、それが、多忙化を引き起こさないかどうかということを十分考えながら、その施策・事業を進めていくことが、施策の完成度というのでしょうか、施策の推進へと導くことができるのでは

ないかと思ったところでございます。

そして最後の、求めていく教育のあり方の三つ目といたしまして、「子どもの情報活用能力の育成」を目指すとともに、それを支える「教職員のICT活用の指導力の向上」、またICT活用も踏まえながら、公務の効率化を図るとともに、「教職員の多忙化解消」を進めることで、教育の根幹を担う教員が、より子どもたちの学びや成長に関わるよう、「学びの環境整備」を進めて参りたい、そのように押さえたところでございます。

以上の事柄を教育委員会としてしっかり押さえて、第4期の市川市教育振興基本計画を策定して参りたいと考えております。上手にまとめることができませんでしたが、皆様方の忌憚のないご意見を頂戴いたしまして、本当にありがとうございました。私からは以上でございます。

○田中市長

ありがとうございました。私からも改めて御礼申し上げます。

今、教育長からもありましたが、教育振興大綱に基づく次期計画について、それぞれ教育委員の皆さん方からのお考えを拝聴いたしました。

そのお考えをよく理解した上で、しっかりと活かして参りたいと思います。

私の方では至らない点があるので、教育委員の皆さん方にご意見をいただくという機会でありますが、私の質問は非常に稚拙なものであるかもしれません。

ただ、私が素直に感じることを少しお話させていただいて、皆さん方に議論を深めていただき、私の中の詰め、頭の整理も同時にさせていただければ大変ありがたいなと思っているところです。

例えば、委員の皆さん方からお話がありましたAI技術の進展ということによって、教育現場でどのように活用していくかという中において、例えばChat GPTというものに代表される、その技術の進歩によって、何かキーワードになるものを入れることによってその答えが自分の考えじゃなくても、大半網羅された、正しいといえますか現在の社会常識になっている答えが出てくると。そういうことが、教育の現場においてどのようなことを、プラスの面から発展的に使うことができる。その反面、総合的に物事を考えていく一人一人の成長を妨げてしまっている、ということがよく言われるんですけれども、私も非常にそこが心配でなりません。

今までの教育が画一的というならば、Chat GPTによって出されてくるような文言によって、自分自身がこのことを判断し、考え、そして前に進んでいくという姿が、実際は減ってしまうんじゃないか。

大高先生の、耳の障がいですとか目の障がいということでもありますけれど、同じように今度は考える能力に障がいが発生するような、そんな思いがしてならないんですけれども、どの委

員の方でも結構ですが、私はこう考え、それに関してはこういうことが問題であって、こういうふうには有効に活用すべきではないかと、その辺をちょっと、いかがでしょうか山元先生。

○山元委員

私もこのことについて、いろんな情報をなるべく見て、自分なりにこういうものなのだなと受け止めるようにしているのですけれども、とても難しい問題だと思っています。本当に危険な面があると思います。確かにその問いへの答えや、あるいは作品でも何でもできてしまう世の中になる可能性がある。だけど、正直これからの時代を生きていて、国によってはそういうものを全面禁止するとかいう取り組みをしている国もあるけれども、便利なものは必ず人間社会の中にどんどん浸透してくる。

だとすれば、私たちはそれをどう使うかということ、さらに子ども達に教えていかなきゃいけなくなるとしています。本当に便利な面があるけれども、やっぱりそれは違う、自分が求めているものではないという、そういうものを考えられる子どもを育ててはいけません。今まだChat GPT、レベルとしてはそう高くないので高校生が実践しているのをテレビで見たのですけれども、高校生でもこれじゃあ不十分で、やっぱり自分たちで直していこうという、次のステップへ進んでいたのですけれども、これがもっと進んだら、本当に完璧なものができるようになったらどうするのって、自分で考えて恐ろしく思いました。それでも、やっぱりそこに、自分としての考えとか判断ができる子どもを、今度は私たちが育てていかなきゃいけないのだなというところで、大変厳しいけれどやらなきゃいけないかなということを考えて、私もそういう情報に触れています。

人類が、いずれこういう人工知能によってすべてコントロールされる時代が来るんじゃないかと危惧されている科学者がいらっしやいます。そういう危険な面もいっぱいある。けど、それを使わないわけにはいかない。そこで、じゃあ私たち教育者はどうあるべきなのか。もう非常に大きな課題だと思います。

○田中市長

ありがとうございます。わかりました。

大高先生いかがでしょうか。医学の分野から。

○大高委員

我々の業界でも新しい機器がどんどんできて、それに対応はしなければいけないんですけれども、要するにその時点でのリスクとベネフィット、どちらを重要視するということなのですね。やはり我々の業界はもうリスクがちょっとでもあったら見送りというのが現状です。

ただ、山元先生が仰ったようにだんだん慣れてくるんですよね。そうすると、この辺からはいいかなという感じで、先ほど市長が仰られましたけど、これで全員が同じ考えを、答えを出しちゃうというのはちょっとおかしい。やはり、アナログですけど、教科書で調べたり、辞書・事典を調べたりして自分なりの考えを出していくというのは大事な、と。ちょっと上手くまとまらないんですけど、今のところやはり我々は、リスクとの関係からちょっと慎重な対応をしているところです。

○田中市長

広瀬委員はどうですか。

○広瀬委員

私は幼児教育の方に寄せておりますので、赤ちゃんが生まれてからすぐにChat GPTを使うかというところではないですけど、乳幼児期の経験を通してというところでは、例えばこの夏の時期ですと、虫の大好きなお子さんは、カブトムシとかクワガタとかを取るために、朝早く起きてやるみたいなのを良く見ますけれども、それは決して、Chat GPTから、カブトムシはこうやって育ちますということだけを示されても子ども自身が満足しないし、子どもが知りたい、採りたいと思うからこそ、出かけて行って、その実体験とともに、それが本当にやりがいとして、良い経験として、また来年も夏になったら採りたいというような循環が繰り返されるというふうに考えると、やはり乳幼児期、小さいときからの実体験・経験というのを、どういうふうに積み上げていくか、というところは非常に大事なと思います。やらされてやるというものではなくて、子どもがやりたいと思って、それをやれて楽しかった、面白かったというところがいかに積み上がって、そして学童期にそれが実はね、というところで教育にも結びついていく、知っていくってこんなに楽しいのだというような実感で繋がっていくと、例えばそこで必要でChat GPTを使うということがあっても、やはりわからないところは自分でも調べたい、という子どもが育っていくのが求められている部分であると思っています。

○田中市長

田中委員いかがですか。

○田中委員

専門ではないんですけども、普通にChat GPTで思うところは、私は危惧していなくて、むしろますますシンプルな国語力であるとか、論理力であるとか、情緒であるとか、そういうところに時間を割けるということで、良いことなんじゃないかなと思っています。

ただ、今は過渡期ですので、おそらくChat GPTの本質は何かというのを、皆が理解したところで、有効に活用できるんじゃないかなと感じていて、今はどちらかといえば検索というか、百科事典を調べる代わりに、ザッと文章が出てくると。

ただ、今それが本当に正しいかどうかというより、このデータがどれほど正しいものであるとかによって左右されるので、それがどれぐらい精度が上がってくるかによって、自ずとChat GPTは何に使うものなのかということが社会的に認知されていけば、基本的には私は良い方向に行くんじゃないか、むしろ正しく理解するということが重要なことというふうに考えております。

○田中市長

教育長からは何かありますか。

○田中教育長

例えば、Chat GPTというのは、これから、様々な教育活動の機会に入り込んでくるものだと思うのですが、一方通行じゃ駄目だと思うのです。やはり、子どもと機械とが双方向の関係で、自分なりの情報をChat GPTを通して、逆にAIの方から、「あなたはこういうところの文章力が優れていますよ」とか、あるいは「こういうところがあなたは向いているようだから、そちらの方面に少し力を注いでみたらどうですか」というような、きちっと対話できる使い方や授業を展開することができれば、非常に使い勝手の良い教材として大きな成果が期待できるものと、お話を聞いて感じたところでございます。

○田中市長

皆さま、ご意見をいただきありがとうございました。

ある方が言っていたのですが、端末を叩いて、そこで意見を構築するということを行っていく中で、最大の問題は、そこには偶然性がないんだと。その自分が行動して何かを感じ取った時に起こる奇跡的な出会いとか偶然性というものが、コンピューターとの対話の中では生まれにくいということを聞いたことがあります。

教育の基本というのは、私は、その一人一人に生きる力を与えてくれることが、いわゆる大原則、教育の目的だと思いますので、その生きる力を与えるための障がいとして入ってこないかと考えたときにですね、ICTを活用するための、市川市としてガイドラインのようなものをしっかりと作っていく必要があるんじゃないかなと。そういうのをちょっと思っておりますね。その考え方が良いのかどうかをまた皆さん方に、ご意見をいただきながらということだと思っておりますけれども、今がチャンスなんだと、山元委員が仰られたのはよくわかるんですけど、若い教員の皆さんに、変えるチャンスをもたらしているような、そういうポジティブな考え方はとても重要だ

と思うんですけれども、より子どもたちが育っていく中でここまではこういう基準を作って、自分たちで考えて行動する、先ほど広瀬委員お話しの中の、興味を持っていることは自分たちが行動して喜びを感じたというか、そこから学びの場が始まってくる。その前段階のところで、これはICT教育の前にしておかなければならないことが、私は間違いなくあるだろうと思っていますので、そこをしっかりと市川市の教育現場の中でも、共通の認識として押さえておくということが大事ではないかなということが一つございます。

生涯学習部長いかがですか。

○板垣生涯学習部長

AIということですが、今、委員の皆さんからも学校教育における子どもたちにどのような影響を与えるかという視点でお話をいただきましたけれども、生涯学習という視点で見ると、今、人生100年時代といいまして、現場へ行きますと、図書館でも多くの高齢者の方が勉強をされていますし、あと公民館でもたくさんの講座を受講されて、一生懸命勉強しているということで、こういったAIの進歩が、子どもだけではなくて大人にどういうふうに影響していくのかというのを、注視していきたいと考えております。

○田中市長

ありがとうございます。突然にすみません。

2個目の質問をさせていただければと思います。

皆さん方のご意見の中にも十分に含まれていた内容ですけども、教員のなり手不足ということですね。

これ教育長、教員になりたいと思う人が少なく、教員の倍率というのが、年々下がっているという現状がありますね。

そういうところがどのように、市川市だけでは解決できないんですけれども、発信していくべきなのか、学校経営という言葉を使っていいんでしょうか。あるいは職場環境の改善、もう一回確認をしておきたいと思うんですが、本当に厳しい状況で、教員の皆さん方がお仕事をしてくださっている。教員の不足、あるいは教員のなり手が少ないということは教育長どういうふうに考えますか。

○田中教育長

まず、学校現場を見ずして、学校はこういうものだとか、いろいろなマスコミ等から、ブラック企業ではありませんけれども、さまざまな話を伺い知る、そういうような情報だけで、学校の教員を捉えてしまっているのかなと思っています。

今は大学3年生から教員試験を受験できる体制にもなって参りましたので、教育実習をはじめ、非常に学校に大学生が入りやすい状況になってきています。そこで、講師の先生も含めてですけれども、ぜひ、学校にいろいろな機会を通して、入り込んでいただいて、子どもと接する中で、学業はもちろんですけれども幅広く多くのことを教える楽しさ。そして、教えることを通して、子どもたちが成長していることを肌で感じることに、それは喜びに繋がっていきますから、意外と子どもたちとつき合ってみると面白いとか、学校って、子どもたちと人間関係を深めることができる。あるいは部活も一緒にプレーができるというような、人と人との関わりの場として得られるものが多いことを理解してほしいと思います。

それから学校給食費の無償化がありましたので、是非若い世代にも、給食を食べていただきながら、給食の持つ意味を、食育を通して若い人たちに理解してもらうことが、学校に興味・関心を抱いていただける一つの要因にもなってくるとも考えているところでございます。

○田中市長

委員の皆さん以外の、現場の意見を、教育次長お願いします。

○小倉教育次長

まず、現状ですけれども、教育は成り手不足とか、目指す若者が少なくなっているというお話がありましたけれども、実はいわゆる成り手不足とか目指す若者が大きく減っているわけではないんですね。

教員の需要が増えていきますので、採用数が増えていまして、それに見合った人たちが応募していないという現状があります。その中で、千葉県の採用試験の現状ですけれども、特に小学校が厳しくて、昨年度は出願時で2.6倍あったのですが、受かっても民間に流れてしまう学生が多く、最終的には1.6倍まで落ちています。そして、本年度はさらに、出願時で1.9倍でありますので、最終的にはさらに落ちてしまう。これが現状であります。これをどうしていくのかという話ですけれども、今学校に求められているものが多すぎると思います。これをしっかりと切り分けて、家庭で担っていくもの、地域が担っていく、あるいは行政が担っていくところということで、切り分けること。そして、教員というのは、やはりこの仕事に就いている人は、子どもと接したい。あるいは、授業がしたい、と。そういう人たちがなっていますから、そこに集中できるような環境を作ってあげることが大事だと思います。従いまして、切り分けたことによって、学校で先生方が自由にできる時間というのを、自由というのはお互いに議論したり、雑談したり、明日の授業のことを考えたり、そういった自由にできる時間というのを作っていくことが大事ではないかなと考えています。

○田中市長

ありがとうございます。これは最初に大高先生だと思んですが、保護者から教育が必要になってきているというお話がございました。

ご意見をもう少し述べていただけますか。

○大高委員

先ほどお話したように職業柄若いお母さんと接する機会が多いのですが、まず何が子どもに対してリスクかというのはほとんど気づかない。

先ほど具体的に言いましたのは、目のことで、耳のこと、それから睡眠のこと。教育長が仰られた食育に関して自分はあまり把握してないのですが、ちょっと聞く限りではスナック菓子とか、そういう事例はあると思いますが、それをお母さんたちが逆に率先している。スマホを見ながら私の前に来るお母さんもいるし、それから、道で会うと歩きスマホしているお母さんもいる。ですので、幾ら子どもたちを叱っても教育しても、やはり親の理解が得られなければ、それは浸透していかないと思います。

じゃあどういふふうに教育していけば良いかというのは、自分でもなかなか具体的にはないんですけども、少なくとも僕が接している彼女たちには、いや、これはこうでしょ、ああでしょというのをお話ししますが、わかっているんだかわかっていないんだか。

もともと、言葉遣いがちょっと、皆さんも感じていらっしゃると思うんですけど、良い年の大人がそういう言葉を使うの、ってところからも始まってしまうので、なかなか難しい問題だと思うんですけどもそれをどう具体化していくか、ちょっと皆様方のお知恵を逆に拝借したいと思っています。

○田中市長

今、その保護者の教育というところに、ちょっと視点を当てたのは、教員の皆さん方の負担を増やしているところにその保護者の存在がとても大きいんじゃないかと、いふふうに思っていますね。藤井部長。

○藤井学校教育部長

子どもを育てるには学校の教員と保護者とで連携をして、1人の子どもを育てていくというのがベストだと思います。

ただ、子どももいろいろな多様性とか特性がある子がいるように、保護者の方もやはりこういった世の中で、いろいろな考え方を持つ方が非常に増えています。

子どもを学校教育でこういうふうに育てたいという思いが、なかなか共通理解を図れない保

護者の方も中にはいらっちゃって、結構学校の方に対して担任の指導方法ですとか、学校の経営についてご意見や要望をされる保護者の方も増えているのは確かに事実でございます。

ただ、学校の方も保護者については、子どもを育てるという強い思いからそういうことも出てくるんだという意識もあるので、どうしてもそういう保護者とは、じっくりと話し合いをしたりする時間も費やしているのが現状になります。

○田中市長

往々にして負担になっているということですね。

○藤井学校教育部長

負担になる場合も出てきます。

○田中市長

若い先生方が、そこで精神的な負担を強いられることが数多いだろうと推察しますね。

学校、教師と親御さん、そしてまた地域で子どもたちを育てると、そういう市川の連携といえますか、特徴というのはさらにクローズアップされてくると良いなと思っています。

教育次長どうぞ。

○小倉教育次長

市長が仰ったように、家庭・学校・地域の連携というのは本当に市川市は古くから歴史がありますので、こういった地域はなかなかありません。先日も国会議員が視察に見えましたけれども、本当に驚いていました。自然に地域の方々が学校に入ってきて、協力をしてきている。こういう雰囲気は、これからもぜひ伸ばしていきたい。これはまさに市川の強みだと思っています。

○田中市長

はい、どうもありがとうございます。

これは質問ではありませんけれども、広瀬委員から教育格差の解消に向けたという、そういう捉え方ができるご発言がありまして、大変参考になりました。大変勉強になりました。

合理的な配慮とそれから基礎的な環境整備ということ。

こういう整理がきちんとされているんだなというふうにお聞きしたんですけども、これからもその格差の解消に向けての必要な支援を提供することというのは、教育委員会がしっかりと行ってもらいたいというふうに思います。

より深く、あるいは一方で高いステージを目指す人たちに対しても、その機会を与えていく。コンテンツを提供する、そういうこともやはり重要なのではないかなと。個別最適な学びが実現される市川の教育の現場というのを希望していきたいと考えています。

最終的に、この市川で生まれ育った子どもたちが将来の市川市を支えていくということになります。突き詰めて言うならば、子どもたちの未来が市川市の未来であるということでありますが、また同時に健康寿命日本一を目指している市川市においては、世代や年代を問わずに学び続けられるという素晴らしい環境というのをこれから市川市の重要な課題として考えて参りたいと思います。

委員の皆さん方から、これは付け加えて、これからの中にぜひ加えてもらいたいという点がありましたら、どうぞ再度ご発言をしていただければと思います。

いかがですか、今の意見のやり取りの中でも、この点はちょっと話しておきたいというのがございましたら。山元先生いかがですか。

○山元委員

市長から教員に対する非常に温かいメッセージをいただいたのですけれども、もう一つ今私感じていることは、若い教員たち、実は家庭に帰れば、新しい世代を育てる父であり母なんですね。その教員は、自分の子どもの子育てと両立させるということがとても厳しい状況にあります。だけど、これはやっぱりおかしい。これから安心して教員になってもらうためには、自分の家庭生活、子育てもきちんとできる環境、これをやっぱり目指して欲しい。そういう中で、すでに取り組んでいただいている部活動の問題であるとか、保護者への対応など時間外の対応であるとか、こういう点については、何かしらのやはり対応策を立てて、家庭に帰してあげられる職場であって欲しいというところを、一点付け加えてお願いしたいと思います。

○田中市長

田中委員、いかがですか。

○田中委員

初めての会議で皆さんのご意見をお聞きし、非常に勉強になったところです。

保護者の対応というと私も業務の中で、学校現場、保護者の関係ってのは聞くところがありますので、やはり自分1人で対応するのではなく、やはり外部であったり、チームであったりとか、1人で抱え込まない方が、結論は正しいんだけど他の人が同じような意見ということであまりうまく解決しているような例もありますので、やはりそのいろんな知恵というのはあるのかなと思いますので、ぜひ、進めていただければと思っております。

○田中市長

市川市の教育に関しては、教育長を中心に、これからも他の自治体にも誇れる市川市の教育の姿を作っていきたいというふうに思っております。

給食の無償化、私が市長に就任した時にはもう教育長はもう悲願でありまして、これは良いことですね、やりましょうということで一致をしまして、舵取りをしていただいて、ご父兄の皆さん方にも喜んでいただいております。

教育長から最後のまとめのお言葉をいただければ。

○田中教育長

今、市長からありましたけれども、学校給食費の無償化も、ただ単に無償化を進めるというだけではなくて、先ほど申し上げた食育を通じていろいろ考えることがあると思うんですね。それは、無償化の持つ意義に繋がっていくと思いますので、これからも、学校給食費の無償化・食育を核にしながら、健康や体力向上などいろいろな方面で考えていきたいと思っております。まとめとして、今日の話の中で、一番大事なことは、一人一人に合った学びを提供していく。そのためには、やはり個別最適な学びを我々も学校も作り上げて、そして子どもに満足してもらえるような、いわゆる子どものニーズに応える教育をしっかりとしていかなければと、改めて心を新たにしたいところであります。

そのためには、市長を中心としながら、教育委員会がイニシアチブをとりながら、そして教育委員、地域の方々、また、議員の皆様方からもお力をいただきながら、作っていくものだと思っておりますので、今後とも、お力添えを賜りますようお願い申し上げます、最後の話とさせていただきます。

○田中市長

今回は市川市の今後の教育の在り方について意見を交わすことができ、非常に意義深い時間となりました。一層教育に対して真摯に向き合っていきたいという、その思いを強く抱いたところであります。

今後も本市の教育行政の振興に向け、皆様のご協力を賜りたいと考えております。

引き続きよろしくようお願い申し上げます。

また、オブザーバーの皆さん方、市議会議員の皆さん方にも同席し、一緒に会議の内容を聞いていただきましたことを大変にうれしく思っております。

それでは以上をもちまして、第1回総合教育会議を閉会いたします。

皆様、本日はありがとうございました。